

芥川龍之介「手巾」論

—新渡戸稲造の影響—

相川 直之

はじめに

「手巾」(大正五・一〇『中央公論』)について、芥川龍之介は「大正五年九月二五日付泰豊吉宛書簡」で、「中央公論へは新渡戸さんをかいたので社会的反響が僕にとつて不快なものでない事を折つてます」と記している。また、作品の発表とほぼ時を同じくして、『新思潮』の巻末「編輯の後に」には、「K」による以下の言葉がみられる。「文明批評を狙つた『手巾』の如きは、殊に注意して読んで頂き度い」。しかし、吉田精一氏が、「文明批評としてはつつこみ方が足りず、作者自身も問題だけを出して、身をひいてしまつてゐる観がある」と指摘したように、研究史では、作品の「文明批評」の側面に関しては否定的なのが大勢である。

「K」の「文明批評」説を芥川が是としていたかどうかは、定かでない。しかし、作品の内実を、ただにモデルである新渡戸稲造への皮肉と見ていたのでは、自ずと底の浅いものとなるであろう。実際、「手巾」は、新渡戸の「武士道」思想を批判的にはしていないようである。では、一体どこへ目が向けられているのか。以下に考

察する。

一、芥川の新渡戸稲造観

第四次『新思潮』を立ち上げ、本格的に小説を書き始めた芥川にとつて、「手巾」は初めてのモデル小説である。ではそのモデルとなつた新渡戸を芥川はどう見ていたのか。「手巾」からも予想し得る事であるが、尊敬の念はあまり感じていなかったようである。

新渡戸稲造は、明治三九年に法学博士となり、第一高等学校校長に就任した。明治四二年には、東京帝国大学法科教授を兼任することとなつた。「明日の道德」(大正一三・一〇『教育研究』)で、芥川は学生時代を回想して次のように述べている。「其時分の事で最も私の記憶に残つて居りますのは、私が高等学校に居りました頃、校長は新渡戸稲造氏で、同氏の倫理の講義を聴きましたが、(略)或日其講義中に斯う云ふ事を云はれたのです。人間は色々汚いものを有つてゐるから、友達同志でも醜いものを遠慮なくさらけ出し合ふと、互に愛想が尽きて世は成立ない。あの男も此の位下等か、自分も其

の位下等で宜いと云ふ様な事で、滔々として墮落すると言はれた事があります。私は之を聴いて非常に憤慨しました⁶⁾。新渡戸の発言の何が、芥川を「憤慨」させたのか。「大正五年九月三日浅野三千三宛書簡」において芥川自身、「大学生は概して下らないからそのつもりで相手におしなさい下らない人間はどこにもあるからつて自分を下らないレベルまで引下げる必要は少しもありません下らない奴はほとんど軽蔑してお進みなさい軽蔑は（根拠のある限り）美德です／僕もその美德だけは持つてゐます⁷⁾」と述べている。これからすると、もし自らをさらけ出したとしても、新渡戸がいうような「汚いもの」を自分は持つていない、他の「下らない人間」たちと同一視してくれるなといったあたりが、「憤慨」の理由であると思われる。

他に、「読書の態度」（大正一一・九『良婦之友』）に、「兎に角、何者にも累⁸⁾らはされずに、正直な態度で読むがよい。何者にも云ふ意味は世評とか、先輩の説とか、女学校の校長の意見とか、さういふ他人の批判を云ふのである⁹⁾」、とある。この文章が婦人雑誌への寄稿であるという状況も勿論あるが、一方で、大正六年に東京女子大学初代学長に新渡戸が就任した事実を踏まえてのあてこすりと読めなくもない。

これらを見ると、芥川は、新渡戸稲造のことを、軽蔑とまではいえないまでも、軽視していたといえそうである¹⁰⁾。

二、新渡戸の著作からの影響

こうした芥川の態度が反映したのか、「手巾」には、主人公長谷川

謹造を軽んずる傾向が見られる。磯貝英夫氏の、「この作品でねらわれているのは、新渡戸稲造すなわち長谷川謹三先生である。作者は、その先生をかなり高いところから見下ろして書いている。片頬に皮肉な笑いを浮かべて書いている¹¹⁾」、という指摘は首肯できる。

浅野洋氏によると、「芥川の視線は、新渡戸稲造という（人間）よりも、彼の代表的著作『武士道』に注がれ、その（書物）をフィリターとする極めてブッキッシュな世界の再構成をめざしたように思われる¹²⁾」、という。浅野氏の指摘の当否は後で検証するとして、ここでは、新渡戸の著作が、どのくらい「手巾」に影響を与えているかを見ていく。

まず、息子を失った母親が、手巾を握りしめて、悲しみに堪える話は、新渡戸の『世渡りの道』（大正元・一〇 実業之日本社）に見られる¹³⁾。

或日本婦人が外国の婦人を訪ふて其安否を尋ねた時、婦人は久しく無沙汰に打過ぎたことを謝し、其申訳の理由として近頃最愛の子供を失ふたことを述べ、日本風に笑ひながら、この不幸を物語つた。婦人が帰つて間もなく、僕がこの外国婦人を訪ふた。すると、曩の外国婦人は折柄傍に来合せて居た同じ外国婦人と、この不幸なる日本婦人の挙動を批評して居た。乙婦人は云ふ「私はどうも合点が行かん。日本の女は真面目も真面目、自分の子供を失ふた如き真面目なる事実を、笑ひながら語るとは合点が行かぬ。一体日本婦人には人情といふものがあるのであらうか。どうも、薄情の極の様に見える」と。之を聞いた甲

婦人は「あなたは御覧にならなかつたか、彼女の口には笑を含み、言は爽であつたが、眼には涙が溢れて居るのにお気がつかなかつたか。手に持った手巾たしずきを頻りに絞つて居たのにお気付になりませんでしたか。顔に青筋を走らせる様にして、張り裂けんばかりなる悲哀を我慢した、克己の努力にお氣付になりませんでしたか。」といふて乙婦人の説を反駁し、転じて僕に向ひ「日本人の笑は深き研究を要するものではありませんか」といふた。同じ笑でも其の内容に至つては、見る人が見れば斯の如き大きな差違がある¹³。

また、長谷川謹造が母との対談中に想起する、ベルリンの子供達についてのエピソードに似た話は、新渡戸稲造『帰雁の蘆』（明治四〇・一二 弘道館）の、「九九 忠孝論 名なくして実あり」に、ボンでの出来事として記されている。

ボンに在学中だつたが、学校へ出掛けようとして二階の階段を降りて来ると、下宿屋の小娘二人が一人は十二に一人は九歳一頻りに声をたてゝ泣く。「何事か」と尋ね、慰藉せんとしたら、ベソ掻く間に姉の方が「あのいゝ御爺さんの天子様が死なれた」と云ふた、其日の新聞は未だ見なかつたが、聞けば老帝ウヰルヘルム一世が崩御された号外が達した許り。小供の言葉使ひから僕の心に映たのは、どうやら自分の家の老人でもかくれた如く、肉体上縁も由縁も無い、又た肉眼を以て一度も拝した事無い雲上に御不幸のあつた歎き方とは、一寸受取り難かつた、

尚妹の方が云ふに「私の大好きな御爺さんがなくなつちやつた」、如斯言葉は、警察官が聞いたら不敬事件を持上げるか知らんが、頑是無い小供には、これより以上の敬愛の尊語がない¹⁴。

それぞれ、細部の相違が認められるが、ほぼ「手巾」はこれらを典拠の一部としているといえよう。ちなみにこれらの指摘は未だなされていなかったと思われる。

他に、長谷川謹造の言動に関しても、新渡戸テクストからその面影を見出すことができる。

例えば、「一私が長谷川です。／先生は、愛想よく、会釈した。かう云へば、逢つた事があるのなら、向ふで云ひ出すだらうと思つたからである¹⁵」、という長谷川の仕草は、新渡戸が、「面識なき人に逢ふた時は、紹介する人の手を籍らずに、『私は云々の者でありますか……』と自ら進んで自分を紹介する。之を英米の習慣に比ぶれば著しく手軽である。我日本の習慣も大陸風に似て居る。『私は某所の某といふ者でありますか……』といつて面識なき人に対しても、自ら自分を紹介する。僕はこれを善い習慣と思ふて居る。巧に之を応用すれば、非常に有益のことであるが、近頃の人は兎角之を利用せぬ傾向がある¹⁶」、と『世渡りの道』で勧める自己紹介の方法と合致する。

また、長谷川は、「教育家としても、令名ある先生は、専門の研究に必要でない本でも、それが何等かの意味で、現代の学生の思想なり、感情なりに、関係のある物は、暇のある限り、必一応は、眼を通して置く¹⁷」、と描かれ、「博覧強記を自負してゐる先生¹⁸」とある。しかしその反面、「先生は、ストリントベルクが、簡勁な筆で論評を

加へて居る各種の演出法に対しても、先生自身の意見と云ふものは、全然ない」、であるとか、「何度かこんな満足を繰返してゐる中に、先生は、追々、読んでゐる中でも、思量がストリントベルクとは、縁の遠くなるのに気がついた。そこで、ちよいと、忌々しさうに頭を振つて、それから又丹念に、眼を細い活字の上へ曝しはじめた」、と記されている。長谷川のこうした側面について、初谷順子氏が、「興味のない本を学生の思想理解のためと、読んではいけるが、これは上だけで、本当の意味で思想を理解しているとは言ひ難い。ただ教育者としてのポーズとして読んでいただけではないかと思えてくるし、芥川はそう描いている」、と批判されているように、確かに読書の仕方には特徴がある。比較するならば、作中のストリントベルクの文章を翻訳した小宮豊隆は、その文末に次のような感想を掲げている。「ストリントベルクは恐ろしく頭の可い人である。独逸訳の訳者シエリングと云ふ人も可成細かな頭を持つてゐるらしい。私は日本語の貧弱と自分の頭の曇りとを悲観しながら、随分苦しい思ひをしてやつと是丈のものを造り上げた。一機会さへあれば私は続けて仕舞ひまで翻訳し了らうと思つてゐる。翻訳が済んだら、私は私の此議論に対する意見を書いて見たい」。これを見るならば、長谷川の読書態度の特徴が明らかになるだろう。

この長谷川のいささか要領を得ない読書のあり方もまた、単なる中傷ではなさそうである。新渡戸の著作には次のようにある。「僕は読書が嗜で、手に触れた書物は総て考へずに読む癖があつた。考へなしに多読するから、読書の結果が身になることが少なく、労に比して効が乏しい」。読書量の多さを誇ると共に、あるいは謙遜からか

も知れないが、活用し得ていないことが記されている。また、「思量」が眼前の本から「縁の遠くなる」様子は、「八九年前、希臘の古代書を読むで居たことがある。読むで行くとな面白くなる、つい止められなくなる。益々読むと云ふ様になる。僕があまり古歌を読んで居たのを見て、妻が不思議に思ひ『何でそんな古いものを御読みになるのか』と質され、ア、自分は農業史を調べて居るのであつたと氣付いて、中止したことがある。兎角本道よりも、岐路の方が面白くなる。面白いから、其岐路の方ばかりを辿行き、肝腎の根本を忘れる様なことが往々ある」、といったところを参考にしたのはなからうか。

さらに言えば、「先生は、由来、芸術―殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさへ、この年まで何度と数へる程しか、見た事がない」、という文化的な事柄に興味を示さない長谷川の設定も、「僕は我子に前記の如く自由に学問を選択させて居る。法、文、工、農、その何れでも当人の選択に一任してある。只彼にして殊更好むところがなければ、願はくは技術を修め、以て国の殖産興業に資したい。文学は余暇に慰にするなら差問ないが、専門にするのは可くないと云ふのである。中止せよとは云はぬ。只之を奨励せぬのである」、という新渡戸の考え方に沿うものである。

久米正雄の証言に、「この『手巾』といふのは、一宮にゐて書いたものですが、元々、あの材料は僕のものだつたのです。新渡戸さんのことを書いたもので、一宮で雑談してゐるうちに、僕がかう云ふものを書かうと思つてゐるといつたら、『僕にそれをくれないか、中央公論から頼まれて来てゐるんだ』といふ訳で僕が話してやつたものです」とある。これからすると、久米からの受け売りで「手巾」

を芥川が仕上げたように思われる。しかし、そればかりではなく、何らかの段階で新渡戸の著作を参考にして、長谷川謹造の人物造型を豊かにしたものと見える。長谷川の造形は新渡戸の著作を反映したものと、ここまでは言えそうである。

三、新渡戸の著作の更改

先ほど浅野洋氏の論を引いたが、三好行雄氏も「近代の醒めた眼による武士道の批判というテーマは明確である」と指摘されている。このように、これまでの研究史では長谷川の「武士道」思想も、新渡戸の思想であるとして読まれてきた。笠井秋生氏も、「この作品における芥川の真の意図は、武士道の型を武士道だと信じる長谷川先生を諷刺することであつた」と述べ、さらに「勿論、この芥川の諷刺は、『武士道』の著者新渡戸稲造その人に向けられている」という見解を示されている。

しかし、これは長谷川謹造が、新渡戸稲造そのままであることが前提となつている。では、「手中」に所謂新渡戸離れはなかつたのだろうか。この疑問は、長谷川、新渡戸各々の「武士道」理念の比較が焦点となる。

「手中」において、長谷川の「武士道」の理念は、以下のように説明される。「先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、可成顯著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆ど、これと云ふ程の進歩も認めない。否、寧ろ、或意味では、墮落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、

この墮落を救済する途を講ずるのには、どうしたらいいのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論断した。武士道なるものは、決して偏狭なる島国民の道徳を以て、目せらるべきものでない。却てその中には、欧米各国の基督教的精神と、一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に帰趣を知らしめる事が出来るならば、それは、独り日本の精神的文明に貢献する所があるばかりではない。惹いては、欧米各国民と日本国民との相互の理解を容易にすると云ふ利益がある。或は国際間の平和も、これから促進されると云ふ事があるであらう。——先生は、日頃から、この意味に於て、自ら東西両洋の間に横はる橋梁にならうと思つてゐる」。

ここに含まれる、「武士道なるものは、決して偏狭なる島国民の道徳を以て、目せらるべきものでない」という部分については、新渡戸『武士道』の「武士道の浸潤したる多種の道徳を考究して、之れが比較説明を歐洲の典拠に求むるに当り、武士道は毫も殊有の伝達たるべき特種の性格を有するものに非ざるを認めたり」という箇所からの影響を、清水康次氏が指摘している。

だが、『武士道』の以下の部分とを照合するとどうだろうか。

日本人の性格に於ける彼の欠陥短所は、其の責又大いに武士道に存するとは、頗る其当を得たり。吾人の形而上哲学思想に乏しきは——我國の青年の科学研究に於て、既に噴々の名声を宇内に馳せたるものありと雖、一人能く哲学の範圍に於て、何等の貢献をなせるもの無し——其原因を繹めるに、武士道の教育制

度の下に、形而上学の訓練を閉却したるが故にあり。吾人が過大の感情、躁急なる性僻の責は、功名心に帰すべく、外人の往々非難するが如くに、吾人若し自負尊大の念に熾なりとせば、これ又た名誉心の病的結果たるに外ならず。

日本の現状認識において、前者では「精神的」な「墮落」といい、後者では「形而上哲学思想に乏し」といわれているが、どちらも人々の内面における短所を指摘している。しかし、その原因について、前者では「武士道」精神が不足しているためとしているのに対して、後者では、「武士道の教育制度の下に、形而上学の訓練を閉却したるが故」に「功名心」や「名誉心」が強くなったため、と説明している。即ち新渡戸はそれを、「武士道」精神が根強く残っているための「欠陥短所」であると指摘しているのである。こうしてみると、長谷川の「武士道」は、新渡戸の「武士道」の論理を裏返した主張であるといつてよいだろう。

また、「手巾」が発表された時には、既に新渡戸稲造自身が「武士道」思想に対する態度を変化させていた。新渡戸は乃木將軍の殉死に際して、次のような発言をしている。「乃木大將の死は武士道の見地から見ると如何かといふに、私は嘗て武士道に関する小著を公けにしたが為めに、世人動もすれば私を以て武士道の研究者若くは鼓吹者のやうにいふ人もあるが、私は到底も武士道を研究したなどといふ大袈裟な事はいへず、従つて武士道の奥義などいふ事は私には分らないのである。アレは只西洋人に向つて、日本にも道德がありますぞ、武士道といふこゝろいふ一種の道德がありますぞといふ事を

知らずる為めに書いた本で、引例なども余り適當ではないのがあり、又間違つて居るものがあるかも知れぬ。詰り私は武士道といふものを斯う考へて居る。アレは世界的なものでない。一國の道德である。而して一國に於ても其精神は各階級に通じて違はぬにしても、形式は時代を限つて、又階級を限つて行はれたもので、道といつても場所と時に限りがあるものと思つて居る」。ここには、自己批判ともとれる新渡戸の言葉が記されている。もしも、芥川がこの事実を知つていたとすれば、わざわざ作中で新渡戸の「武士道」を批判する必要はないと考えるのではないだろうか。

しかし、実のところ長谷川の「武士道」が持つ新渡戸離れの側面が、單なる誤読に基づくものかどうかは、不明である。しかし、新渡戸稲造のどこか憎みきれない性癖などを揶揄することはできても、「武士道」の精神まで否定できただろうか。もしも、本気で新渡戸の「武士道」を批判したつもりならば、それに対する反論も芥川は当然予期しただろう。しかし、冒頭で引いた書簡の「社会的反響が僕にとつて不快なものでない事を祈つてます」、と弱気な心情を洩らしている。これは、新渡戸批判は本意ではないことの表れではないだろうか。結果的に「手巾」は、新渡戸「武士道」との衝突を回避している。

四、大正初期の学生思潮

高橋龍夫氏は、長谷川が殖民政策を専門にしている事に触れつつ、「まさに長谷川先生の思考や態度は、そのまま大正の言説を無意識

にも体现しており、この主人公像そのものが、大正の言説の問題を直截に暗示していると言えるのではないだろうか」として、「当時の知識人を少なからず取り込んでいた大正の言説への一種の抵抗と批判」を示したと述べられる。また、下野孝文氏は、「政治的、時局的言説をほとんど残していない芥川ではあるが、この展開には、彼の生きた所謂大正デモクラシーという時代の雰囲気が自ずと反映していたと考えられる。それが、先に触れた世代の問題、具体的に言えば、新渡戸の思想とのズレを生み出す大きな背景となつたのではないか」、という見解を示されている。

どちらも、芥川が作品を通して何かを批判しようとしていたとする意見であるが、長谷川の意味は実のところ自明とはいえない。これを説明しようとすると、「大正の言説を無意識にも体现」であるとか、「当時の知識人を少なからず取り込んでいた大正の言説」など、いささか漠然とした表現に頼らざるを得ない。その原因の一つには、先の吉田氏が「つつこみ」が足りないとして評したテキストの性質が関わってくるだろう。

しかし、「手巾」に描かれた長谷川「武士道」が、新渡戸「武士道」の正しい写像ではないとするなら、どうであろうか。モデルは一時的な借用に過ぎず、実は芥川のある主張を伝えようとしているのではないだろうか。今一度、結末部を読み直すことでこの問題に答を出したい。

「手巾」の最終局面、長谷川は、「別に読む気もなく」再びストリントベルクの著作に目を落とす。そこには、「一私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分巴里から出たものらしい、手巾のことを話

した。それは、顔は微笑してゐながら、手は手巾を二つに裂くと云ふ、二重の演技であつた。それを我等は今、臭味と名づける。……」と記されており、これに接して長谷川は動揺する。

が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。さうかと云つて、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それらの平穩な調和を破らうとする、得体の知れない何物かである。ストリントベルクの指弾した演出法と、実践道徳上の問題とは、勿論ちがふ。が、今、読んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心もちを、擾さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と——先生は、不快さうに二三度頭を振つて、それから又上眼を使ひながら、ちつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……

この部分について、酒井英行氏は、「芥川は、ハイベルク夫人に西山夫人を重ねて、二人の演技を同質化しているのだ。(略)芥川は、ストリントベルクのハイベルク夫人批判を借りて、西山夫人の臭みを批判しているのである」とされている。しかし、「先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない」とあるのだから、西山夫人を関心の中心と見ることは難しい。

また、三嶋謙氏は、「ではなぜストリントベルクの言葉が先生を動揺させたのか。それは感動した夫人の行為が、型であり臭味だと否定されたからではない。ストレントベルクが指摘しているのは、繰り返されることによつて、ひとつの行為が据わりのよい型になつて

いくことの臭味である。先生は、夫人の内面の自然な表出を、女の武士道と規定し、日本人独自の型の中に位置づけた。そのことへの批判と受け取ったから、先生の安定した内部、満足の情は揺らいだのである」と述べられる。しかし、本文には、「ストリントベルクの指弾した演出法と、実践道徳上の問題とは、勿論ちがふ」、という断りがある。これを意識するならば、三嶋氏の考察には賛同し難い。

長谷川を動揺させた原因は、「得体の知れない何物か」、「湯上りのんびりした心もちを、擾さうとする何物か」と記されている。その内実をここから把握することは困難である。ここにはただ、長谷川が偶然接した一文によつて自らの信念を乱され、畢には不快感を得たという出来事が記されるに留まる。

遡ると、それまでの長谷川は、「先生の頭の中は、西山篤子夫人のけなげな振舞で、未だに一ぱいになつてゐた」状態の「幸福な回想」に身を置いていた。西山夫人については、三島由紀夫が「西山夫人のステレオタイプな人生的演技を、一つの静止した形で、『型』の美とみとめてゐた」と評したり、三好行雄氏もまた、「西山夫人は美しい」と述べたりしている。しかし、その一方で笠井秋生氏が「私は何回となく西山夫人の姿態を想像してみたが、ついにそこから美を感じとることはできなかった。西山夫人の姿態に美を感じるのには錯覚ではないか」と反論するように、作中での西山夫人の位相は判定が難しい所である。

とはいえ、長谷川の目には、西山夫人が「眩しいものでも見るやうに」、すばらしい存在として映ったことは明かである。では、語り手にとつて西山夫人はどうだったか。「客は、先生の判別を超越した、

上品な鉄御納戸の単衣を着て、それを黒の緞の羽織が、胸だけ細く剩した所に、帯止めの翡翠を、涼しい菱の形にうき上らせてゐる。髪が、丸髻に結つてある事は、かう云ふ些事に無頓着な先生にも、すぐわかつた」、などを見ると、語り手は長谷川が感知する以上に、より鋭く夫人の長所を見抜いている。語り手の高いところから見下ろした視点については、既に磯貝氏の指摘を紹介したが、それは長谷川の言動全てに否定的である事ではない。この語り手の性質には、美点は美点として認める素直さがある。

こうして見ると、夫人が悲しみの表出を抑えていた場面についても、「一婦人は、顔でこそ笑つてゐたが、実はさつきから、全身で泣いてゐたのである」、の部分や「婦人は、心もち頭を下げた。晴々した顔には、依然として、ゆたかな微笑が、たたへてゐる。」、という箇所添えられた「一」(ダツシュ)に、語り手自身もまた深い感動を得ている余韻があると考えることが出来るのではないだろうか。そして、それは長谷川よりも鋭く本質を見極めた一層の深さが籠められてゐるのかもしれない。

その後、長谷川は独自の「武士道」理論に西山夫人をあてはめ、先の「幸福な回想」に身を浸していた所、唐突に幸福感が奪われる箇所は既に引用した通りである。しかし、そのきっかけは何であつたか。ストリントベルクの「臭味」に関する演技批判の部分である。手巾こそ符合しているが、冷静に見れば西山夫人とは状況が異なるにも関わらず、西山夫人から得た感動を、長谷川は簡単に放棄し、不快感に陥るのである。

内容の吟味が曖昧なままに、長谷川が不快感を得た要素の一つと

して、その著作の背景が影響しているだろう。若者の支持がある、あるいは西欧の思想である、だから優れているだろうという先入観の存在は十分考えられる。

海老井英次氏の指摘に、「新渡戸稲造においては（調和）が可能とみられている東西の亀裂・矛盾が、芥川たち大正の世代には調和の不可能な、ましてや日本的なものをもって西欧的なものと調和しようなどとは到底考えられないと思われている」とある。既に指摘した所であるが、新渡戸稲造と長谷川謹造とを同一視することには注意が必要である。だが、それに加えて、作中で長谷川の内部では、ストリントベルクと西山夫人とは、「東西の亀裂」として調和し得なかつた。これをそのまま芥川思想として受け取るべきなのだろうか。

ここで当時の芥川達の思潮を伝える参考資料として、同世代の日夏歌之介の証言を引く。

われら青年は（予も芥川君も佐藤君も亦さやうであつたであらう）新しい芸術を翹望してゐた。新芸術とは、われら当年の青年にとつて、碌々と文場に小狡く泳いでゐる職業作家の俗套作品を路傍の崖下に振り落し、明治も半世紀に及ぶ間に、さも長い翻訳時代実験時代手引草時代をもういゝ加減に脱尽したいといふ希望に立出して、青年日本人のうちの世界的内的生活を精明に生活してゐる少数者のみの精神をよく反映するやうな文学であれば、その用語は古語廢語俚語詭語たるを問はない、その世界は古王朝たると西洋中世たるとを問はない、その衣裳

の外形を透して内在する新らしきものの心の光を芸術のかたちとして看取することの喜びさへ有ちうれば、それで十分足りるのである。かう考へて、われらは放達な、心の触手を四方八方にのばして、一つの新出現を待ちかまへるに余念なかつた。自信は、今日の青年の繋けても及ぶまじき程に、満々たるものがわれらにあつた。

日夏の証言によれば、芥川を含めた彼等の世代は、西欧の文学であれば何でも有り難がつていた訳ではない。また、日本的なものの中にも、「青年日本人のうちの世界的内的生活を精明に生活してゐる少数者のみの精神をよく反映する」ものがあれば、躊躇なく受け入れるという、柔軟な態度を尊重していたようにみえる。芥川の、「羅生門」（大正四・一）『帝国文学』や「鼻」（大正五・二）『新思潮』、「芋粥」（大正五・九）『新小説』など所謂王朝ものが受け入れられたその背景には、「少数者」であるとはいへ、こうした青年の思潮が横たわつていたのである。

「手巾」には、西欧の戯曲を研究する者がいる一方で、「梅幸」を小説に登場させた学生も描かれている。語り手もまた、西山夫人のこしらえにも美点を認めることが出来たのである。

モデルとなつた新渡戸稲造が、実際にストリントベルクの著作から動揺を受けたかは未見である。しかし、日本近代文学史を見回してみても、西洋の思想に頼つて自らの立場を形成した事例は多い。日本自然主義文学の発端はゾライズムの輸入であつたし、坪内逍遙と没理想論争をした森鷗外の立脚点はハルトマンの理論を援用した

ものであった。高山樗牛はニーチェからヒントを得て美的生活を提唱したと言われる。まさに芥川以前の近代文学史は長谷川謹造のように、西欧からの書物によって動搖させられてきた歴史とも見受けられる。芥川から見れば前世代の人々の理論構築は、借り物の思想と映ったのではないだろうか。

「手巾」の作者は、学生達に支持されているストリントベルクの著作に何が書かれていようと、西山夫人の美点を認めたのであれば、自身の感性を信じるべきだという、換言すれば書物に振り回されない自意識の確立を、長谷川謹造の不快感を通して訴えたのである。

おわりに

「臭味」という漢字にあてられた「メツツヘン」という振り仮名は、先に紹介した小宮豊隆訳を踏襲したもので、清水康次氏によれば、『Mäzchen (ドイツ語)』。ばか、ばかなこと。臭味はくさい、いやみ。『臭味』はやや意識である⁽¹⁾、とある。

「臭味」という語に着目するならば、読みとして「くさみ」と「しうみ」とが考えられる。筆者の手元にある明治三十八年八月初版、大正九年七月第三四版発行の『新式いろは引節用辞典』には「しうみ」の項目はなく、「くさみ(臭気)」で、「悪しき臭⁽²⁾」とある。また、明治三十七年二月初版、明治三十八年二月第一五〇版発行の『言海』では、「くさみ」はないが、「しうみ」の項で、「ニホヒ。カ。クサミ⁽³⁾。」とある。これらを見ると、小宮訳にある、人柄や行爲などから受けるいやな感じを「臭味」というのは、大正初期においては、比較的

新しい用法だったようである⁽⁴⁾。

そして、新渡戸稲造『修養』には、「くさみ」が次のような文脈で使われる。

虚栄心の注意を与ふる時、僕は腕力に就て之を責めたが、然し是は腕力に限つたことではない。小伶俐の人、小学問のある人は比較的虚栄心に富み、兎角之を鼻の端に出したが。／＼恐ろしき愛宕、鞍馬の天狗より／＼なほ恐ろしき里の小天狗／＼少し学問でもすると、直に之を出したくなるのが、多数の通弊である。昔の儒者は「学問は実に臭いものである。恰度大根を煮ると同じく、煮れば煮るほど臭くなるが、全く煮尽せば臭味がなくなる」と云ふたものがある⁽⁵⁾。

この学者の「臭味」の話の新渡戸は好んでいたらしく、『武士道』や『帰雁の蘆』でも引いている。そして、この逸話から伝えられるのは、生半可に書物を読み、それに振りまわされてはいけないという教訓である。まさに、「手巾」を書いた芥川も共感する所だったのではないだろうか。

芥川龍之介は、新渡戸稲造のことを表面的には師と認めていないような素振りをしていた。しかし、新渡戸が与えた教訓の僅かに種一粒は、芥川の中で芽吹き、「手巾」という作品の中に結実したのである。

注(1) 引用は『芥川龍之介全集第一八巻』(平成九・四 岩波書店) 書簡

番号二五三番。

- (2) 第四次「新思潮」の同人で、インシヤルがKであるものに、久米正雄と菊池寛(草田杜太郎)とが挙げられる。理由は示されていないが、海老井英次氏は、「K」を「多分久米正雄の筆によるもの」と推測する(『芥川龍之介論攷—自己覚醒から解体へ—』(昭和六三・二 桜楓社)一二七頁)。この海老井氏の推測は結果的に正しいようである。なぜなら、この前号の「新思潮」では、菊池寛が「久米も芥川も当分仕官はしない。二人は此の夏一ノ宮で暮した。」(菊池寛「校正後に」(大正五・九『新思潮』四一頁)と記している。これに反論する形で「K」は、「口前号に久米と芥川とは当分仕官しない」とあつたが仕官しないのではない。口が無のだ。あれば何時でも務めに出る。殊に久米の如きは、菊池と同じく記者になるつもりなので、只管時期を待つてゐるのである。」(『編輯の後に』(大正五・一〇『新思潮』八九頁)、と記している。これからすると、「K」が菊池ではなく久米であると考えられるからである。
- (3) 「編輯の後に」(K記らず)(大正五・一〇『新思潮』八九頁。
- (4) 吉田精一「芥川龍之介」(昭和一七・一二 三省堂)一一五頁。
- (5) 本論に於ける新渡戸稲造の経歴は、佐藤全弘「新渡戸稲造博士略年表」(昭和六二・四 再版『新渡戸稲造全集別巻』教文館)を参照した。
- (6) 引用は『芥川龍之介全集第一二巻』(平成八・一〇 岩波書店)一〇一一頁。
- (7) (1)に同じ、書簡番号二四九番。
- (8) 傍点引用者。引用は『芥川龍之介全集第九巻』(平成八・七 岩波書店)二一九頁。
- (9) 江口渙が、学生時代の芥川について次のような証言をしている。「そのとき一高に新渡戸校長の排撃運動が起こった。そのころの一高の学生の中にはすでに一派の自由主義運動が入っていたところで、新渡戸校長の、型の古い道徳観、封建的な偽善的道徳観に対して、これに抵抗して校長の排撃運動が起こった。(略)校長排せき運動が大きき動き出したので、新渡戸校長は学生を講堂に集めて、声涙共に下る演説をしてつよく辞意を表明した。そして、さつさと自宅へ帰

つてしまった。それにおどろいた学生側は大勢の寮生が先頭に立つて小石川の校長の自宅に校長を訪ねて辞職を思いとどまるように懇願することになった。そのとき久米正雄などはそういう引きとめ運動などには加わらないで、わざと寮に残っていた。(略)ところが芥川だけはついていった。やがてみんなと一しよに帰ってきたので久米正雄が芥川に「なんだつてあんな引きとめ運動なんかについて行つたのだい」ときくと、芥川はこう答えたというのだ。『何もわざわざついて行つたわけじゃないんだ。あやうつて押しかけていった奴が校長の前でどんなこと言うか、それに興味があつて行つたんだ。そうしたら、どんなことが起こつたと思う。新渡戸校長が玄関に出てきて挨拶する、それに対して寮の幹事の連中や寮生の代表が、辞任撤回の懇願の文章を読み上げたんだ、ところが、読みはじめるのとたちまち、わつと泣き出した男があるんだ。それが、きみ法科の奴だね。いちばん頭の悪い奴なんだ。ふだんからいちばんバカな奴はいかなる場合でもやはりいちばんバカだ、ということが解つて愉快だつたよ。」と芥川がいつていたというのである。(『晩年の芥川龍之介』(昭和三三・一〇—一『多喜二と百合子研究』)。引用は『晩年の芥川龍之介』(昭和六三・七 落合書店)七一頁)。これを見ると、冷ややかに学生と新渡戸との遣り取りを観察していた芥川は、熱烈な新渡戸反対派でもなく、傍観的な立場をとつていたことが窺える。

- (10) 磯貝英夫「作品論 手中」(昭和四七・一二『国文学』)七四頁。
- (11) 浅野洋「『手中』私注」(昭和五八・一二『立教大学日本文学』)三二頁、浅野氏は作品のモチーフである「手中」に関して、「武士道」(第十一章 克己)の「举止沈著、精神重厚なるに於ては、容易に感情の爲に乱すところとならず。曾て記す、日清戦役の当時、某連隊の兵士の一市を出発するに際し、多数の人民は、隊長以下の軍隊に訣別せんが為、停車場に群集せり。一米国人あり、拳国奮起の此秋なるを以て、歡呼の声必ずや天地を動かすものあらんことを予想して、其所に到り見れば、群集中には、兵士の父あり、母あり、情人あり。然るに某米国人の、却つて奇異の感をなして一驚自から禁ずる能はざりしものは、汽笛一嘯と共に、列車の進行を始むるや、

数千の人民は、帽を脱して、恭しく訣別の札を告げ、而して手巾を振るものも無く、一語を叫ぶものも無く、唯だ耳を欷つれば、僅に歎歎嗚咽の洩るゝを聞くのみなりしと云ふ。」(『武士道』 English text first published in 1900 by The Leeds & Biddle Co., Philadelphia, 第一期日本語訳は明治四一年三月、丁羊出版社。引用は丁羊出版社版一三六一—一三七頁)の部分を引き、「無論、手巾はストリントベルクの《ドラマトルギー》中にもみえ、そこからアイデアを得たとするのが自然だが」(三九頁)、と断りをいれた上で、「(『挙止沈着、精神重厚』のゆえに容易に感情を乱さない日本人の態度の一例として、『手巾を振る』者も居なかつたとある一節に、『手巾』の作者が、一篇の最も効果的な小道具を思つて眼をとどめる一瞬があつたかも知れない」(三四頁)、と述べている。

(12) 川上光教氏は『手巾』論(昭和六〇・六『論究』三四頁)において、『手巾』と以下に引く新渡戸テクスととの類似を指摘する。「友人などから、偉かつたと思ふた人のことを聞かれる時、僕は北海道で見た人のことを語る。この人は四十前後の婦人で、夫は極めて下級の官吏で、月給二十四五円を貰ひ、小児が四人もあり、且つ夫は肺病であつたため、薬代などに追はれて三度の食事さへも自由でなかつた。かゝる不幸の境遇に居りながら、婦人は曾て苦しい顔色を見せない。乳児を加へて四人の子供を女手一人で育て上げ、不治の病に苦んだ夫を、多年一日のごとくに看護し、備に辛酸を嘗めたが、愚痴一言いはず、常にニコくして居た。物に感ぜぬ馬鹿かといへば、なか／＼さうでない。夫が亡つた時の態度は実に烈婦の趣があつた。／＼夫を喪ふた後は、心配の余か、看護の疲れか、程なく重症にかかり、医者も匙を投げて了つた。愈々危篤と、医者から宣告された時、この婦人は平生信頼して居る人を枕頭まくらもとに呼び寄せ、死後一切のことを依托し、寸毫すんごうも狼狽し、煩悶する様が見えなかつた。眼中には一滴の涙もなく、目と唇とは相交らず、春の如き笑を含んで居た。信頼された人が、僕の許に来て『あなたは彼女を偉い々々といはれたが、私は窃ひそかに褒め過ぎた言葉であらうと、思ふてゐるが、今日病院で、彼女の健気な態度を見、始めて真に偉いことが分り、心から感心した』といふたことがある。幸此の婦人は今も

猶壮健で居る」。新渡戸稲造『世渡りの道』(大正元・一〇 実業之日本社)。引用は『新渡戸稲造全集第八卷』(昭和四五・三 教文館)二八一—二九頁。

(13) 引用は『新渡戸稲造全集第八卷』一九五—一九六頁。

(14) 引用は『新渡戸稲造全集第六卷』(昭和四四・五 教文館)一七二頁。

(15) 引用は『芥川龍之介全集第一卷』(平成七・一一 岩波書店)二七〇頁。

(16) (14) に同じ、八六頁。

(17) (15) に同じ、二六五頁。

(18) (15) に同じ、二六八頁。

(19) (15) に同じ、二六八頁。

(20) (15) に同じ、二六七頁。

(21) 初谷順子『手巾』—武士道とさうして型と……(平成元・三『東京成徳国文』)五三一—五四頁。

(22) 小宮豊隆訳『ストリントベルクの俳優論(一)』(大正四・三『新小説』)八〇頁。この訳を『手巾』作成の参考にしたという指摘は、(11)の浅野洋氏の論に指摘がある。ちなみに、芥川は小宮豊隆について「批評家は大がい莫迦だよ 中では小宮豊隆が一番利巧だがね」(大正五年一〇月一日付井川恭宛書簡)。(一)に同じ、書簡番号二五九番)と、実力を認める発言をしている。

(23) 新渡戸稲造『修養』(明治四四・九 実業之日本社)。引用は『新渡戸稲造全集第七卷』(昭和四五・一 教文館)三三二—三三三頁。

(24) 類例は他に、「僕は北海道に行つてから、多読の疾やまひに罹つた。農学校の図書館にある書物は、片はしから総て読んで了はうと云ふ、無謀な大野心を起した。総てとは云ふが科学上のもではない。歴史、地理、伝記、政治、経済等に関したものを、手当り次第に読破した。然し読破したと云ふものゝ、只意味を一通り解するまで、少しの考へもなく、目的もなしに読んで過ぎぬ。それでも読むは読むは、殆ど淫説と云ふ毒の中つた有様であつた。／＼多読の結果は(一)眼を害して、今日眼鏡なしには書物を読むことが出来なくなつた。(二)何れは是れの差別なしに濫読したので、頭脳が粗雑に流

- れて、緻密を欠くやうになつた。(三)種々な説を見たので、自分の定説がなくなつた。例へば或説が起つたとすると、直に其反対説にはかう云ふことがある。さうばかりは言はれぬと云ふ考が起り、何れの説に対しても是非の論が直に起り易くなつた。悪く云へば見識がなくなつたのである。(23)に同じ、二一三—二一四頁)。「新刊の書物(英独等の)は月々に幾種となく刊行される。僕は到底之を精読するだけの余暇がない。それ故に、此等の書物はザツト考へなしに一通り読んで行く。而して是はと思ふ様な点に行くとき符号をつけて置く。符号をつけて置いた所は、後になつて再び読み返す。読み放しでは、全体を記憶することが出来ぬ。肝腎な一部分さへも忘れて了ふことがある。かうして要点だけに符号をつけ、後に再読すれば、其書物中の要点は永く記憶に留まる」(23)に同じ、二一八頁)。「僕は必要があつて、時々久しく手にしなかつた大部のものを読むことがある。見ると処々に自分でつけた符号がある。読むて行く中に曾て読むことある様な心持がする。する筈である。読むに相違ないのである。能くかう云ふ大部物を読むだものと、自分ながらに感心することがある。雑誌などでも亦さうである。自分で感心する様なことがある。併しそれが少しも用に立つて居らぬ。読むだことがあると云ふに過ぎない。又大抵の人の説は、之を聞いても一向珍らしい心地がせぬ。何処とは判然せぬが、何だか曾て読むだことのある様な心持がする。そして其説は稍久しく考へなければ、何処が出所なりしか、一寸思ひ出されぬ。いはゞ頭脳が紙屑で埋つて居る様である。全然自分の糊御をする様であるが、実際自分は目的もなく多読したのを悔ゆる」(23)に同じ、二一四—二一五頁)。
- (25) (23)に同じ、二一七頁。
 (26) (16)に同じ、二六七頁。
 (27) (23)に同じ、七二頁。
 (28) 久米正雄『二階堂放話』(昭和一〇・一一 新英社)三二三頁。
 (29) 三好行雄『芥川龍之介論・第一章—大川の水—』(昭和四二・三『現代のエスプリ』)。引用は『三好行雄著作集第三卷』(平成五・三 筑摩書房)一八頁。
 (30) 笠井秋生『手巾—武士道とその型—』(昭和五八・一〇『日本近代文学』)。引用は『芥川龍之介作品研究』(平成五・五 双文社出版)八四頁。
 (31) (30)に同じ、八四頁。
 (32) (15)に同じ、二六六—二六七頁。
 (33) 引用は『武士道』(丁洋出版社版、(11)参照。)二二—二三頁。
 (34) 清水康次『注解』(15)に同じ、三六一頁。
 (35) (33)に同じ、二二—二三頁。
 (36) 新渡戸稲造『乃木大将の殉死を評す—大将の心事を明かにせばあらゆる方面に好影響を及ぼさん—』(大正元・一〇『中央公論』)。引用は『新渡戸稲造全集第四卷』(昭和四四・一一 教文館)四五—四五三頁。
 (37) 高橋龍夫『手巾—論—大正の言説との位相—』(平成八・一一『稿本近代文学』)五七頁。
 (38) (37)に同じ、同頁。
 (39) 下野孝文『新渡戸稲造と長谷川謹造……『手巾』試論』(平成九・一『叙説(叙説舎)』)二七頁。
 (40) (15)に同じ、二七七頁。
 (41) (15)に同じ、二七七頁。
 (42) 酒井英行『二人の(賢母)—久米の「母」と芥川の「手巾」—』(平成元・九『文芸と批評』)三八頁。
 (43) 三嶋謙『手巾—崩壊の予感—』(平成一一・一一『解釈と鑑賞』)四一頁。
 (44) (15)に同じ、二七六頁。
 (45) (15)に同じ、二七六頁。
 (46) 三嶋由紀夫『解説(芥川龍之介著「南京の基督」)』(昭和三一・九『南京の基督』角川文庫)。引用は『三嶋由紀夫全集第二七卷』(昭和五〇・七 新潮社)三二六頁。
 (47) (29)に同じ、一八頁。
 (48) (30)に同じ、八四頁。
 (49) (15)に同じ、二七五頁。
 (50) (15)に同じ、二六九頁。
 (51) (15)に同じ、二七五頁。

- (52) (15) に同じ、二七五頁。
- (53) 海老井英次「手巾」—文壇への入籍届—(昭和六三・二『芥川龍之介論攷—自己覚醒から解体へ—桜楓社) 一三三頁。
- (54) 日夏耿之介「芥川王朝文学の出生」(昭和二二・一『新文学』。引用は『日夏耿之介全集第五卷』(昭和四八・九 河出書房新社) 三二四頁。
- (55) (15) に同じ、三六二頁。
- (56) 大田才次郎編『新式いろは引節用辞典』(明治三八年八月初版、大正九年七月第三四版発行、博文館) 九一三頁。
- (57) 大槻文彦編『言海』(明治三七年二月初版、明治三八年一月第一五〇版発行、吉川弘文館) 四三二頁。ちなみに芥川は、「澄江堂雜記」(大正二二・一一『隨筆』)の「猫」において、『言海』の「猫」の項目について感想を述べている。
- (58) 芥川の「臭味」の用例では、書簡の中に、「鄭板橋と云ふ明人の楸檀軒と云ふ法帖を見て以来僕は太に気が強くなつたよ吾だの役だのと云ふ字を書いてゐて甚僕と同臭味だ今にあゝ云ふ字で新思潮の表紙を書いてやらうかな」(大正六年七月二日付松岡謙宛書簡)。引用は(一)に同じ、書簡番号三三二番、とある。
- (59) (23) に同じ、二〇三頁。
- (60) 「孔孟の書は幼学者に入るの第一の教科書にして、又た老者が以て議論の憑拠となす所なりきされど、唯だ此二聖賢の典籍を諳んずるに過ぎざるの徒の、會て社会に重視せられたること無く、孔子の書の訓詁にのみ通ずるの徒を、俚諺にも『論語読みの論語知らず』と嘲り、真の士人は、文学の徒を貶し、目するに書臭紙魚を以てしたり。三浦梅園の如きは、『学問は臭き菜のやうなり、能く能く臭みを去らざれば、用ひがたし。少し書を読めば、少し学者臭し、余計書を読めば、余計学者臭し、こまりものなり』と曰ひ、学問若し、心念に同化するよりして、品性に発露すること無くば、真に学びたりとは謂ひ難しとせり。蓋し武士より見れば、学芸に専らなる人は器械の如く、学問は倫理的情操に隷従するものにして、人も宇宙も共に齊しく靈あり、道あるものなりき。武士道は、宇宙の進行を以て非道德なりとする、ハックスレーの断定を容るゝ能はざりしなり」。(33) に同じ、二二—二三頁。
- (61) 「此先生の口から、謂はゞ己の同僚なる独逸学者の悪口を聞いたのは案外に思つたが、勿論珍らしい事ぢやない、兎角学者は互に罵倒酷評の交換を以て得意とするし、又先生の冷評した、新語難句を振廻はすのを悦ぶ者が多い、『俗名で呼べば菜種は安くなり』、浅き思想は平易の語を借れば底が見え過ぎる、近世の学者間では、学名や述語が、昔の秘伝秘法の代りをする、如何なる職業にも多少秘密がある、学問商売は、佞屈聲牙を商品とする。／＼三輪執斎の言葉に『学者は兎角大根の如し、生煮えに煮えると臭気紛々、好く煮れば又煮た香がし、煮え過ぎると又臭い』との意を述べたのを見たことがあるが、臭味も商売の種、学者と云ふ代物も、頭許り発達した者は、世界通じて似た者らしい。古句に『儒者の庭小人の徳生茂り』とは満更嘘でもなさ相だ」。(14) に同じ、九一—九二頁。
- (あいかわ なおゆき、広島大学大学院博士課程後期在学)